

## 『アジア「歌垣」論 附・中国雲南省白族の歌掛け資料』

保坂 達雄

である。

文字資料に限りがある古代文学研究は、これまで参照軸を他の時代、他の地域の資料に求めてきた。戦後に限っても一九八〇年代には沖縄の祭祀と神謡から文学の発生を擷もうとした。一九九〇年代後半になると中国西南部の少数民族にまで足を伸ばし、歌垣に焦点を当てて研究を進めるようになった。工藤隆氏が先鞭を付けたが、続いて入ったのが本書の著者岡部隆志氏である。一九九七年のことである。それ以来の二十一年間に及ぶ研究の成果が本書である。全十六章全六編の論考に資料編として七編を収録、総頁数五一〇頁に及ぶ大著であり、著者による中国少数民族歌垣研究の集大成

日本側からの中国少数民族文化への関心は著者ら以前からもあった。一九八〇年代にはいくつかの調査団が組織された。稲作、焼畑、霊魂、音楽、建築など幅広い分野の調査を行った調査団もあった。そのなかで鈴木正崇は『西南中国の少数民族』（金丸良子と共著 一九八五年）、『中国南部少数民族誌』（一九八五年）を著した。歌垣に関して言えば星野紘氏が何度も各地を訪ねた（『歌垣と民間の民族誌』一九九六年）。また土橋寛により貴州省凱里県にある香炉山から爬坡節での対歌の現場が報告されることもあった（『中国・貴州省の歌垣』朝日新聞一九八三年九月九日夕刊）。しかしながら、これら一九八〇年代の調査は改革开放後とはいえ、見学にも制限が

あり調査期間も短かった。ところが一九九〇年代になると、外国人が入ってもかなり自由に調査することができるようになった。調査地に入り歌垣を見学するだけでも、歌垣の概要はおおよそ掴める。しかし、それだけである。文学研究にとって重要なのは歌掛けの詞章そのものである。詞章の分析を通して歌掛けのリアルな現場に迫らねばならない。そこで著者は「歌掛けの言葉のやりとりをそのまま記録し翻訳する」、歌掛けの詞章の文字化を考えたのであった。とはいえ行うのは容易ではない。歌掛けは一、二時間に留まらず数時間に及ぶ。時には一昼夜に及んだものさえあったという。こうした長時間にわたる詞章を、中国側の研究者の協力も得て、現地の少数民族語から中国語、さらには日本語へと重訳していったのが、岡部氏らが採用した調査方法であったのである。本書資料編の資料Ⅰ・Ⅱには、こうして得られたテキストの一部が収録されている。

それでは著者は長年にわたる調査活動を通して、歌掛けの何を問題にし何を解いて

きたのか。本書で論じられた問題は、歌掛けはなぜ長時間持続するのかという掛け合いの持続の問題、声と文字の出会いという問題、問答という表現態、およそこの三点に集約できると思う。以下に一つひとつ取り上げてゆくが、その前に本書の目次を最初に紹介する。

Ⅰ章 アジアの歌掛け文化

Ⅱ章 白族の歌掛け文化

Ⅲ章 漢調の歌掛け

Ⅳ章 白族の歌文化と『万葉集』

Ⅴ章 問答論

Ⅵ章 エピローグ

資料編 中国雲南省白族の歌掛け資料

資料Ⅰ 喬后観音会での二時間

四十七分に渡る歌掛けの記録

記録

資料Ⅱ 白族恋歌対唱歌の歌曲曲例

資料Ⅲ-1 漢調(田埂調)歌掛けの

記録

資料Ⅲ-2 「田埂調」聞き書き調査記

録(話者・張樹先)

資料Ⅲ-3 「田埂調」及び「天子廟

会」(松林での市)についての聞き書き(話者・李志英)

資料Ⅲ-4 再び「田埂調」について

張樹先に聞く

資料Ⅲ-5 歌手への聞き書き

二

台湾ヤミ族のミヴァライなどが紹介される。また掛け合いの方法としては一対一もあれば、複数の者同士もあるという。もう一つ注意すべき点は、同じ民族でも地域によって旋律が異なり、異なった旋律の地域同士では歌掛けはしないという。歌掛けをする範囲と通婚圏・市場の経済圏は一致するところである。

「はじめに」でアジアには歌を掛け合う文化があるとした上で、Ⅰ章「アジアの歌掛け文化」では、アジアの歌掛けの諸相が紹介される。歌掛けには恋愛や結婚を目的にした歌の掛け合いもあれば、広く歌を掛け合う歌掛けもある。本書では恋愛や結婚を目的にした歌の掛け合いを「歌垣」、そうでない一般的な歌の掛け合いを「歌掛け」と呼ぶ。この歌垣的でない歌掛けの例として、外部の客が村の内部に入る際の通過儀礼としての歌掛け(貴州省侗族)、歌によって喧嘩する、悪口の掛け合い(モン人)、裁判における歌掛け、酒宴歌としての歌掛け、葬送での「打歌」(大理白族)、

ここから次第に著者の最初の調査地であった白族の歌掛けに焦点が絞られ、Ⅱ章では雲南省白族の歌掛け文化が論じられる。調査したのは、剣川県石宝山の歌会、洱源县<sup>ツェイビ</sup>碧湖海灯会、洱源县<sup>チヤオホ</sup>喬后観音会の三か所の歌掛けであるが、白族の歌掛けは即興で恋愛の歌詞を掛け合う歌垣的歌掛けである。歌は七七五・七七五という定型の音数律に乗せて歌われ、句ごとに脚韻を踏むという。歌垣に来るのは、歌うことを楽しむために来る人、結婚相手を探しに来る人、歌の上での恋人と会うために来る人など多様であり、掛け合いの長さは一時間から二時間。長いになると六時間、一晩続いた例などもあるという。なぜ歌の

掛け合いはこれほど長く続くのか。

この問題を取り出して特別に論じたのが、II章の「ツービー湖畔の掛け合いにおける歌掛けの持続の論理」という節である。

これまで歌垣における歌の展開を説明する論理として、内田るり子や辰巳正明らによって「歌路」という概念を用いて説明されてきた。歌路は恋愛から結婚もしくは離別に至るプロセスをいくつかの段階に分け、その段階ごとに決まった歌い方をして実際の歌掛けは進行していくとするものである。しかしながら、実際の歌の掛け合いにおいては、テキストの順序通りには進まず、「歌路は歌垣で歌われる歌全体を整理し秩序づける概念」でしかない、著者は歌詞の分析を通して指摘する。

歌掛けをする男女は相思相愛の関係をまず作り上げる。相手の名前や住所を聞き出し、一緒に来ないかと誘う。男が誘うと女は巧みにはぐらかし難題を出す。男はそれを切り抜けながら、さらに誘うというように駆け引きが続く。歌掛けはすんなりとは進んでいかない。歌路を簡単に進行させな

いことが、歌掛けの持続の論理になっている。歌掛けは対立と協調を演じる文化だとも言えると述べるのである。

続く「繞る歌垣——番後の歌垣——」の節では、白族の一人が歌路を「繞路<sup>ラオル</sup>」と呼んだことに示唆を受けて、「歌の掛け合いは同じような内容を何度も繰り返しながらぐるぐるまわり、そうやって歌っているうちに互いに相手の心を理解し、徐々に関係を深めていく、ということであるようだ」という理解に達する。即ち、ぐるぐる回るところに歌の掛け合いの特徴があるとする。歌掛けの持続の論理もこうした特徴と深く関わってこよう。

その一方で歌掛けの持続の問題は歌を掛け合うことそれ自体を楽しんでいると見ることもできる。歌垣に集まる人々が多様であるように、歌掛けは結婚に至る出会いの場という実用の目的だけでは捉えきれない。そうでなければ、出会ってすぐに自分の家に行こう（結婚しよう）などとは誘わない。遊びだから言える言葉なのであつて、歌の遊びとしての性格も視野に入れて

おかなければならぬだろう。それ以上に考慮しなければならないのは、調査し記録した歌掛けのテキストが、どのようなレベルの歌掛けを記述したもののなかという点である。地域の違い、また時代の変化のなかで、テキストは変化し変遷する。文字化された歌掛けのテキストはそれ自体でたいへん貴重なものだが、その解釈はテキスト批判を経た上で進められるべきであろう。

### 三

第二に取り上げられた問題は、声と文字の出会いという問題である。白族には漢字を用いて白語を表記する「白文」と呼ばれる表記法がある。日本でいえば万葉仮名に近い表記法である。この白文で刻まれた明代初期の「山花碑」の表記を例にして、白族文化における声と文字の出会いについて論じたのが、II章所収の「山花碑」における音（声）と文字」という節である。「山花碑」の表記法には借字、訓字、音仮名、派生文字の四つがあるが、このうち八

割が漢字の意味と読みをそのまま用いた借字と、漢字の字形と字義を利用し訓みは白語の音で訓む訓字である。このことは白文が白語と中国語との双方に精通していなければ読めない表記であったことを物語る。

同じように文字を持たなかった日本人が、漢字を利用しながら漢字仮名交じり文という独自の表記体系を作り上げていったの

の大きな違いがここにある。白文の表記は「山花碑」ばかりでなく、語り芸の台本の「大本曲」「本子曲」においても使用されている。しかしながらこちらの表記では、借字や訓字よりも音仮名の割合が圧倒的に多くなっているという。その理由は「大本曲」「本子曲」の白文表記が民間の芸人や歌い手の朗唱用であって、音(声)への依存度が高かったからだと指摘する。

白族の歌文化には「田埂調」と呼ばれる、漢語で歌われる漢調の歌もある。Ⅲ章「漢調の歌掛け」の「異文化をつなぐ歌掛け——雲南省鶴慶の漢調「田埂調」について——」では、この漢調を取り上げる。

漢調の歌は白族調が七七七五なのに対し

て、七七で一句をなす。これを基本としながら実際に歌う場合は七音にとらわれずかなり自由であるという。ここから著者は「異文化をつなぐ歌のあり方」ととって重要なのは、「歌の様式の基本形はあるとしても、かなりゆるやかに運用されているという点」だという結論を導き出す。

Ⅳ章「白族の歌文化と『万葉集』」の「対唱歌の力学」の節は、対立を作りながら協調するという中国少数民族の掛け合いの力学の視点から、日本古代の恋歌を読み解く論考。こうした適度な距離を生み出すやりとりの歌がある一方で、『万葉集』の相聞歌の多くは不在の対象を歌う。この点を問題にして、「相手が今此処にいないその欠落(距離)を、抒情的な表出によって埋めようとする」、そうした力学が様式として獲得されたところに、抒情詩の成立を見出している。

#### 四

Ⅴ章で論じられたのは問答論である。日

本古代の文献資料では神話的叙事が問答形式で歌われる例はない。ところが、雲南省の少数民族には、楚雄彝族の「梅葛」のように問答体で歌われる創世神話がある。「一人の宗教者による神話叙事の朗誦は、神話的時間に属していて、聞き手はその神話起源の世界に引きいれられる。が、問答という掛け合いで演じられると、聞き手は、いわば即興の掛け合いを聞くように、その現在の時間を共有してしまうということがある」。このように論じて問答という表現態を時間性の問題として捉える(問答論——彝族の神話「梅葛」と折口信夫の問答論——)。

ここから折口信夫の文学発生論の核心的なテーマである問答論の検証に入る。折口は神と精霊との問答から問答形式の発生を説いた。神は精霊を圧伏させる優位な位置にあつて、その関係は垂直的である。この折口の問答論に対して、中国少数民族の掛け合いの現場からは支配・服従の関係は見せず、男女の掛け合いにおける両者の関係は対等であり、水平的であると手塚恵子

は批判した。著者は折口は「問答の原理的な関係性を抽出」したのであって、「問答の表現態そのもの持つ意義については関心をもっていない」と指摘する。また「折口の中では、水平性はすでに織り込み済みなのだとも言える」とする（「水平としての問答論」）。

そしてV章最後の論考が「芸能と問答論」である。この節は折口信夫論としても圧巻である。白文で記された剣川の「本子曲」を取り上げ、本来叙事的な物語である本子曲が、なぜ問答形式という表現態で演じられるかを問題にする。ここから折口の問答論に入る。一旦は神と精霊との対立に始原を置く垂直的な掛け合い論を批判した上で、「詞で戦争する」とする折口の掛け合い論を「対等性に言及していないとも言えない」として、「結局、折口の理論では、この水平的な掛け合いは、神への精霊の服従という、垂直的な儀礼的場面に収斂されてしまふ」と理解する。

ここから折口は「掛け合いの語争いや闘争性を掛け合いの様態として」描きなが

ら、なぜ「歌垣の本質として突き詰めなかつたか」という問いを発する。そして、その答えを折口の「招かれざる客」と「もどき」の芸能論に求める。観客が見る存在として意識されることで祭祀のパフォーマンスは芸能となり、その問答は水平的となる。また神の言葉を翻訳するもどきの存在によって、祭祀のパフォーマンスは芸能となり「見せ物芸」となる。剣川の「本子曲」や舞族の神話叙事詩「梅葛」などが問答形式で歌われるのは、「即芸能であるとは言えないにしても、芸能の条件は十分に持っている」からだと解き明かすのである。

本書で論じられた論点をおよそ三点に絞って述べてきた。歌掛けにおける持続、声と文字の出会い、問答という表現態、これらの主題を中国少数民族の歌掛け調査なかで問題意識として持ちながら、著者の念頭にはいつも日本の古代文学が浮かんでいて、その視線は『万葉集』などに向けられている。記紀歌謡や『万葉集』の歌垣関

連歌は一首か対になった二首である。「問

答」と分類された歌も二首の対である。ところが、少数民族の実際の歌掛けでは長時間持続し、予定調和的に収束しない。

声と文字の出会いの考察も日本では文字資料の側からしか論じられてこなかった。そうしたなかで著者によってもたらされた資料や方法は、これまでの古代文学研究に再考を迫るだけでなく、これを相対化するのに十分な内容に溢れている。これからの研究者は著者らによって切り開かれた中国少数民族研究の貴重な成果を十分踏まえることが求められてくる。決してバックラッシュなど起こってはならない、また起こしてはならないと思う。

二〇一八年五月 三弥井書店刊

本体九〇〇〇円

（ほさか・たつお／東京都市大学）